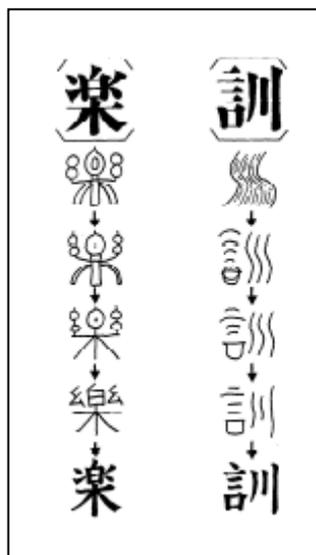


「転注」という用法があります。まず目に見える「象形」と、心の中で形づくる「指事」によって表し、それから組み合わせの「会意」と「形声」によって文字というものが拡大していきます。ほとんどの言葉がこの四つの用法によって表現できるようになったのですが、どうしてもつくりにくい言葉があります。

言葉を文字化しようと思っても、なかなかうまく文字に表現できません。その場合に第一に考えられたのが「転注」という用法です。



ここに「楽」という字がありますが、「楽」というのは楽器の象形です。真ん中にあるのは太鼓で、その脇にあるのが叩くとガチャガチャ鳴る打楽器です。これが台の上に乗っています。実際にこんな楽器が宮中や神社に備え付けられていました。つまり楽器を意味した字です。

ところが、その楽器を使って演奏されるものを表すときに、そういうことを表す文字をつくるというのはむずかしいので、楽をそのまま使って「音楽」という言葉にします。そうすると、英語

の「MUSIC」という意味を表すことができるわけです。

つまり、文字をちょっと応用して使う、使うことを「転注」と呼びます。すでにある文字を基にして、文字の意味をちょっと移動させるわけです。

ところで音楽を聴くといい気持ちになります。その気持ちもこの字で表します。たとえば楽園。この楽園という場合は、別に音楽には関係ありません。

ただ、この場合の「楽(ラク)」というのは、音楽を聴いたときの気分を表すためにこの字を使っているのです。これも「転注」です。文字のつくり方としては象形ですが、使い方は転注であるということになります。

転注でもむずかしい場合は、発音を借ります。これがいちばん安易なやり方です。ですから仮に借りるという名前をつけて「仮借」と呼ぶわけです。「十」という数を表す字がどうしてもつけれないので、まったく同じ発音の別の字を借りてきて間に合わせるというやり方をします。

私たちは「訓」を“クニ”と中国読みをしています。奈良時代にはこの字を“クニ”と読みました。

Nという発音は単独では発音しにくいので、母音をつけてはっきりわかるように「クニ(KUNI)」と読みました。つまり、“クニ”という発音を表す文字として仮借したのです。

「訓」という字は“教える”という意味の字です。「訓辞する」というように使いますが、「訓」というのは、言葉を川の流れのように流して聞かせるほどと従わせることです。

それが「訓」という文字の持つ本来の意味なのですが、その意味を捨てて、音だけを借りたのです。その音が“クニ”です。

では“クニ”の意味するものは何かというと、「国」のことです。これは中国語では“コク”と発音しますが、日本では「くに」のことです。学者でも「クニ読み」という言い方をしていますが、それでは意味を成しません。「クニ読み」と読んで初めて意味を成します。「クニ読み」とは日本の国の読み方という意味です。